

前は〈祈り〉について書きました。私たちの一日は祈りから始まり、祈りで終わります。自分の宗教についてはっきりと自覚していなかったころは、〈何に対して〉祈っているのか、あいまだった自分をおぼえています。「こんなことでいいのかな … 」と、いつも思っていました。いま〈祈り〉は私の生活の〈背骨〉になりました。

さて、再び『わたしが・棄てた・女』に戻りましょう。(『 』内は引用部分です。)

ぼくの手記 (二) (p.27~47)

「女の子なら、どんな女の子でもいい…。」吉岡は下北沢駅(東京都世田谷区)でミツと待ち合わせ、初めての〈デート〉(といっても、そう考えているのはミツだけで、吉岡はそんな感情はかけらもありません)をします。

『背がひくく小ぶとり』で、『場末の駅前マーケットで売っている柿色のスエータに黒いスカート』を着、『だらしない横じわが靴下によって』いる『東京の場末のどこにでも見かけられる顔の女の子』、『玉つき屋やパチンコ屋でよく店番をしている女の子』を見て、『俺もおちたもんだな』と思う吉岡。『どうせ合格しないと思いながら当落発表の紙に自分の名が見つけられない時の、幻滅と味気なさが入りまじった気持ちに似』た気分になったのでした。

男の私は「う～ん、わかるような気がするなあ … 」なんて吉岡と同じ気持ちになりました。(男性のみなさん)私だけでしょうか? 若いころって(自分のことは棚にあげて!)やはり外見でひとを見てしまうんですね。いちばん先に目に飛びこんでくるのは、顔だとかスタイルだとかの「目に見える相手」なんですから、仕方ないところもありますよね(さかんに同意をもとめています!)。相手の性格や考え方とか、やさしさなど〈目に見えないところ〉がわかるためには、時間が必要です。〈目には見えないもの〉こそ、大切なものなんですよね。愛情・まごころ・勇気・おもいやり・正義 … 私たちの人生にいちばん必要なものはみんな《見えないもの》です。

しかし、欲望のかたまりであった吉岡は、渋谷の歌ごえ酒場にミツを連れて行き、サイダーの小瓶に焼酎を混ぜたものを飲ませました。店を出た吉岡は、『すべての男が自分のメタンガスのように黒く泡だつ情欲でつくる言葉』『愛してもいない女の肉体をとろうとする時、つかう言葉』を使ってミツを旅館に連れ込もうとします。ミツは『帰ろうよ、ね、帰ろうよ』と拒否しました。

怒った吉岡はミツを道端に残して帰ろうとした時、背中と肩に鋭い痛みを感じました。心配するミツに、『昔、小児麻痺をやったからそのせいだ。俺の右肩はゆがんでいるし、足も少しわるいんだ。だから女の子にも相手にされない。今まで一度だって女の子に好かれたことはないさ。…』と、つぶやきます。それを聞いたミツは、『「可哀そう…」突然、彼女は姉のようにぼくの掌を自分の二つの掌のなかにはさ』み、『喘ぎながら一つ一つ、言葉を切り、こちらの顔を悲しそうにじっと見つめ……注射をうたれる前の子供の怯えた表情』で、『そうだったん……そんなら……そんなら連れてって……さっきのところに』と、言葉を絞りだしたのです。しかし、吉岡の欲望はすでに消え去っていて、その夜はそのまま別れます。

痛みにうめいた吉岡は、このチャンスを捉えてミツの同情を引くために小児麻痺の後遺症で足が悪かったから女の子にもてなかったと言います。吉岡の『安っぽい映画に安っぽいやくざがつかうような』、『ただ偽悪的な気持ちで口にだしたにすぎなかった』言葉が『はじめてミツの心を捉えた』のです。

なぜ、吉岡の欲望から発せられた言葉がミツの心を動かしたのでしょうか？ 『可哀そう…』—ミツがその感情を吉岡に抱いたのはなぜでしょう？

これまで吉岡の立場から書いてきました。ここで逆の視点、ミツになって考えてみましょう。あなたが女性だとしてください。あなたにとって人生初めてのデートです。自分は中卒の、町工場の事務員です。毎日一生けんめい働いても、わずかなお給料しかもらえません。相手は大学生です。今とちがってある程度の学力があれば、そして選り好みしなければ、合格できる時代ではありません。当時、大学生はエリートだったのです。その大学生とデートするのは。ミツのころは、どんなに輝き、ふるえ、期待にふくらんでいたでしょう。なんでも知っていて、自分の知らなかったことをたくさん教えてくれるだろう。服装も学生らしくパリッとして、カッコいいだろう。自分が知らないすてきな所に連れて行ってってくれるかもしれない…。どんなにミツは楽しみにしていたことでしょう。

「**ぼくの手記(一)**」冒頭にこんな箇所があります。『二人が共同生活を営んだ神田の下宿は、…ノミがピョン、ピョンと飛んで』いて、『長い間雑炊やスケソウダラしか』食べられない毎日で、『裸になると薄い胸に肋骨(あばらほね)が哀れに浮きだす』青年が吉岡だったのです。さあ、あなたがこの青年に会ったと仮定して、どんな印象をもつでしょう。おそらく、理想と現実の落差に言葉も出ず、「えっ、この人が…」と思われるのではないのでしょうか。

もし、私たちが二人の立場に立てば、このデートはお互いに〈期待に反した〉ものであり、「もう二度と会わねえよ!」、「きょうだけね、この人とは…」で終わってしまうのではありませんか？ でも、ミツは「小児麻痺のために足が悪く、そのために女の子に好かれなかった」吉岡に対して『**可哀そう**』という感情を抱くのです。

それは『**憐憫の情である。**』と広石廉二氏は書いています。〈憐憫(れんびん)の情〉…。「憐憫」とは「かわいそうに思うこと」です。広石氏は、『この憐憫の情は、森田ミツを一貫して支えている感情であり、それが彼女の無意識のうちに行う聖なる行為の土台になっている』。さらに『それは高みから憐れな人々を見下ろして感ずるものではなくて、**本能的に他人の哀しみの上に自分の哀しみを重ね合わせざるを得ないもの**』と続けます。〈哀しみを重ねる〉… 遠藤文学のキーワードのひとつです。

【引用した書籍】

- ・ 遠藤周作 『わたしが・棄てた・女』 (講談社文庫、1972)
- ・ 広石廉二 『遠藤周作のすべて』 (朝文社、1991)
- ・ 山田忠雄 他 『大きな活字の 新明解国語辞典 第七版』 (三省堂、2012)